様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６５２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｈ０１５８２

研究課題名（和文）信用スコアの受容に関する社会学的研究

研究課題名（英文）A Sociological Study of Credit Scoring

研究代表者
赤堀　三郎（Akahori, Saburo）

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：３０４０８４５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、大別すると次の3点を行った。(1) 先行研究の収集・整理：信用スコア及び「データ駆動社会」に関する研究動向を世界中から収集し、その成果をウェブサイトにおいて誰でも閲覧可能な形で公開した。他方、専門家へのヒアリングも計5回行い、得られた音声データのテキスト化まで行った。(2) 信用スコアの受容意向に関する実態調査：信用スコア及び「データ駆動社会」に対する「解釈」についての調査を３回行った。(3)社会学理論の再構築：(1)(2)を踏まえて、メタ解釈（＝解釈枠組の解釈枠組）としての社会学理論の研究を行った。以上3点の研究成果は、学会大会等で口頭発表したほか、論文としても公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究においては、デジタル社会の諸問題を扱うのに必要な社会学理論の研究がなされた。この他に、本研究では「データ駆動社会研究会」（Data-Driven Society Study Group: DDSSG）と銘打ったウェブサイト（https://www.ddssg.net/）を立ち上げたが、ここではデジタル社会研究に関するデータベースが広く一般に公開されている。また、本研究で行った調査データについても追って一般に公開する予定である。これらは今後、デジタル社会研究を行おうとする者にとって役立つはずであり、この意味で学術的意義・社会的意義をもつ。

研究成果の概要（英文）：In this study, we conducted the following three major activities (1) Collection of previous research: We collected research trends on credit scores and data-driven society from around the world and published the results on our own website, which is accessible to anyone. On the other hand, we also conducted interviews with experts a total of five times and even converted the obtained audio data into text. (2) Survey on the actual situation regarding the acceptance intention of credit scores: We conducted three surveys on the interpretation of credit scores and data-driven society. (3) Reconstruction of sociological theory: Based on (1) and (2), we conducted research on sociological theory as a meta-interpretation (i.e., an interpretive framework for an interpretive framework). The above three research results were presented orally at academic conferences and published as articles.

研究分野：社会学

キーワード：信用スコア　デジタル社会　与信管理　メタ解釈　データ駆動社会　人工知能

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、人工知能（AI）、ビッグデータ、プロファイリング、予測アルゴリズムなどの研究が進むとともに、それらが情報通信技術（ICT）と結びつくことで、私たちの日常生活のあり方が急激に変わりつつある。中でも、信用スコア（credit score）をはじめとする与信管理技術（credit management technology）はここ数年、大きな注目を集めている。

上記のような変化はこれまでデジタル化と、また、デジタル化が変えていく社会はデジタル社会といった言葉で名指されている。そして、デジタル化はどのように社会を変えていくのか、デジタル社会はどういった意味で新しいかという問いが学術的議論の俎上に乗せられつつある。だがこういった問いの背後には、技術が与件として扱われ、それが社会なるものの姿を染め直していくという技術決定論がある。

こういった動向に対して本研究は、社会学の立場から、技術決定論を離れ、技術も社会的構築物であるという認識から出発した。すなわち、どんな技術も、社会的に受容されることなしには成立しない、とするのである。デジタル化が人々にどのように受け止められるかがその行方を左右するのであって、受容がなければデジタル化もない、ということになる。デジタル化がどのような社会的影響をもたらすかに関しては、目下のところ、複数の展望が競合している。そうした「解釈のせめぎ合い」の中で、結果として社会的分断が生成されることもありうるし、分断を阻止しようとする動きが生じることもありうる。

以上の認識に基づき、受容意向という側面に着目し、社会学の立場からデジタル化にかかわる諸対象を総合的に扱うための枠組を構築すべく本研究は開始された。当初の計画としてはデジタル化の受容の中でも特に、信用スコアサービス、およびその基礎にある与信管理技術の浸透に対象を絞って研究を進める予定であった。

２．研究の目的

本研究は、解釈および受容意向に着目することで、デジタル化など、新技術の社会的影響に係る広範なテーマを扱うメタ解釈（解釈の解釈）という意味での社会学的理論枠組を創造することを目的とする。

３．研究の方法

(1) デジタル化に関する現状と既存の科学的知見を整理する。
(2) デジタル化に関する調査（解釈および受容意向に関する調査）を行う。
(3) (1)・(2)を通じて、社会学な理論構築を試みる。

４．研究成果

(1) 第 69 回関東社会学会大会における連携報告(2021 年 6 月)

「先端技術への社会学的アプローチ法を求めて」という共通論題の下、研究分担者堀内進之介と研究代表者赤堀三郎がそれぞれ口頭発表を行った。

- 堀内進之介「自己定量化の実践と動機：先端技術への社会学的アプローチ法を求めて（1)」
- 赤堀三郎「解釈される人工知能（AI)：先端技術への社会学的アプローチ法を求めて（2)」

(2) 第 16 回日本社会学理論学会大会における連携報告(2021 年 9 月)

「データダブルへの社会学的アプローチ」という共通論題の下、研究分担者河合恭平・堀内進之介、研究代表者赤堀三郎、研究分担者飯島祐介がそれぞれ口頭発表を行った。

- 河合恭平・堀内進之介「モラル・エンハンスメントは複数性の承認を広げるか：データダブルへの社会学的アプローチ(1)」
- 赤堀三郎「デジタル社会とセカンド・オーダーの観察：データダブルへの社会学的アプローチ(2)」
- 飯島祐介「デジタル疎外論の可能性：データダブルへの社会学的アプローチ(3)」

(3) 第 94 回日本社会学理論学会における連携報告（2021 年 11 月）

「先端技術の受容に関する社会学的研究」という共通論題の下で、研究協力者高艸賢・山本耕平、研究代表者赤堀三郎・研究分担者河合恭平・研究協力者山本耕平が、それぞれ口頭発表を行った。

- 高艸賢・山本耕平「予測的ポリシングに肯定的なのは誰か？：先端技術の受容に関する社会学的研究(1)」
- 赤堀三郎・河合恭平・山本耕平「情報技術革命とプライバシー観：先端技術の受容に関する社会学的研究(2)」

(4) 第 17 回日本社会学理論学会におけるテーマセッション（2022 年 9 月）

研究代表者赤堀三郎がコーディネーターとして「社会学理論のデジタルトランスフォーメーション」というテーマセッションを企画し、同セッションにおいて、研究分担者堀内進之介、研究代表者赤堀三郎、研究協力者高艸賢がそれぞれ口頭発表を行った。

- 堀内進之介「民主政論に対するニューロポリティクスのインパクト」
- 赤堀三郎「社会学理論のデジタル化は可能か、あるいは蓋然的か：社会的世界の理解深化のために」
- 高艸賢「物質論的現象学（materialist phenomenology）の可能性：メディアの浸透と社会学理論の変容」

(5) 第 95 回日本社会学会大会における連携報告（2022 年 11 月）

「AI の意思決定支援の正統性と透明性」という共通論題の下、研究協力者山本耕平、研究分担者堀内進之介、研究代表者赤堀三郎がそれぞれ口頭発表を行った。

- 山本耕平「パーソナルデータ利用の正統性と説明可能性への期待：AI の意思決定支援の正統性と透明性(1)」
- 堀内進之介「民主政における AI の決定理由と人間の受容理由：AI の意思決定支援の正統性と透明性(2)」
- 赤堀三郎「何がその背後に隠されているか：AI の意思決定支援の正統性と透明性(3)」

山本報告は、人がパーソナルデータの提供を受諾するか否か、正統なものとして受け入れるかどうかの判断において、自覚的にせよ暗黙のうちにせよ、説明可能性への期待があるのではないかという内容であり、堀内報告は、AI による判断受容の是非については「人間による最終判断（意思決定への何らかの形での「人間」の参加）」が分岐点となっているのではないか、という内容であった。赤堀報告は、これらを受けて、AI の行う判断と人間の行う判断との間にどういった線引きがなされているかに社会学がアプローチをしていく際、社会学がこれまで馴染んできた合理性、意思決定、行為、選択といった道具では AI にかかわる問題を十分に認識できないので、まずはこれらを問い直すところから始めなければならないと結論付けた。

(6) 「データ駆動社会研究会」ウェブサイトの立ち上げ（2023 年 3 月）

上述のように、本研究においては、デジタル化に関する現状と既存の科学的知見の整理、および、デジタル化に関する調査に取り組んできた。2023 年 3 月、本研究を締めくくるにあたり、データ駆動社会研究会（Data-Driven Society Study Group: DDSSG）と銘打ったウェブサイトを立ち上げ（https://www.ddssg.net/）、これらの研究成果の公開に踏み切った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 堀内進之介	４．巻 -
２．論文標題 ビックデータ時代の教育実践――EdTechの可能性と課題	５．発行年 2020年
３．雑誌名 SYNODOS	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山本耕平・赤堀三郎	４．巻 11
２．論文標題 高度情報化社会におけるプライバシー不安：ジェンダー差に注目して	５．発行年 2023年
３．雑誌名 東京女子大学社会学年報	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計21件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 堀内進之介
２．発表標題 自己定量化の実践と動機：先端技術への社会学的アプローチ法を求めて(1)
３．学会等名 関東社会学会第69回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 赤堀三郎
２．発表標題 解釈される人工知能（AI）：先端技術への社会学的アプローチ法を求めて(2)
３．学会等名 関東社会学会第69回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 河合恭平・堀内進之介
２．発表標題 モラル・エンハンスメントは複数性の承認を広げるか：データダブルへの社会学的アプローチ(1)
３．学会等名 日本社会学理論学会第16回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 赤堀三郎
２．発表標題 デジタル社会とセカンド・オーダーの観察：データダブルへの社会学的アプローチ(2)
３．学会等名 日本社会学理論学会第16回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 飯島祐介
２．発表標題 デジタル疎外論の可能性： データダブルへの社会学的アプローチ(3)
３．学会等名 日本社会学理論学会第16回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山本耕平・堀内進之介
２．発表標題 パーソナルデータ利用の正統化された領域に関する調査
３．学会等名 社会情報学会2021年学会大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 塚越健司
２．発表標題 人工知能の発展と主体の自律性について
３．学会等名 情報文化学会第29 回全国大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 高艸賢・山本耕平
２．発表標題 予測的ポリシングに肯定的なのは誰か？：先端技術の受容に関する社会学的研究(1)
３．学会等名 日本社会学会第94回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 赤堀三郎・河合恭平・山本耕平
２．発表標題 情報技術革命とプライバシー観：先端技術の受容に関する社会学的研究(2)
３．学会等名 日本社会学会第94回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山本耕平
２．発表標題 誰がなぜAIによる意思決定を支持するのか：潜在クラス分析によるアプローチ
３．学会等名 数理社会学会第72回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 堀内進之介
２．発表標題 情報技術は人間の道徳性向を補完しうるか？
３．学会等名 科学社会学会第9回年次大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 河合恭平
２．発表標題 公と私を分けることと「社会的なもの」の認識――H・アーレントの思想の社会学的意義と射程
３．学会等名 大正大学学内学術研究発表会
４．発表年 2020年

１．発表者名 山本耕平
２．発表標題 DK選択肢は「隠れDK」を抑制するか――個人情報の利用に関する意識調査を例として
３．学会等名 数理社会学会第70回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 堀内進之介
２．発表標題 民主政論に対するニューロポリティクスのインパクト
３．学会等名 日本社会学理論学会第17回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 赤堀三郎
２．発表標題 社会学理論のデジタル化は可能か、あるいは蓋然的か：社会的世界の理解深化のために
３．学会等名 日本社会学理論学会第17回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 高艸賢
２．発表標題 物質論的現象学（materialist phenomenology）の可能性：メディアの浸透と社会学理論の変容
３．学会等名 日本社会学理論学会第17回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 山本耕平
２．発表標題 パーソナルデータ利用の正統性と説明可能性への期待：AIの意思決定支援の正統性と透明性(1)
３．学会等名 日本社会学会第95回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 堀内進之介
２．発表標題 民主政におけるAI の決定理由と人間の受容理由：AIの意思決定支援の正統性と透明性(2)
３．学会等名 日本社会学会第95回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 赤堀三郎
２．発表標題 何がその背後に隠されているか：AIの意思決定支援の正統性と透明性(3)
３．学会等名 日本社会学会第95回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 飯島祐介
２．発表標題 疎外論としてのローザ共鳴理論の可能性と限界
３．学会等名 日本社会学会第95回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 山本耕平
２．発表標題 科学技術に関する主観的知識のジェンダー・ギャップ：測定と分析手法の検討
３．学会等名 数理社会学会第74回大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 堀内進之介	４．発行年 2022年
２．出版社 光文社	５．総ページ数 256
３．書名 データ管理は私たちを幸福にするか？	

〔産業財産権〕

〔その他〕

データ駆動社会研究会ウェブサイト
https://www.ddssg.net/

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	出口　剛司 (Deguchi Takeshi) (40340484)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授 (12601)	
研究分担者	堀内　進之介 (Horiuchi Shinnosuke) (40590708)	東京都立大学・人文科学研究科・客員研究員 (22604)	
研究分担者	飯島　祐介 (Iijima Yusuke) (60548014)	東海大学・文化社会学部・准教授 (32644)	
研究分担者	河合　恭平 (Kawai Kyohei) (80822220)	大正大学・心理社会学部・専任講師 (32635)	
研究分担者	磯　直樹 (Iso Naoki) (90712315)	東京藝術大学・学内共同利用施設等・特任講師 (12606)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	高艸　賢 (Takakusa Ken)		
研究協力者	山本　耕平 (Yamamoto Kohei)		
研究協力者	塚越　健司 (Tsukagoshi Kenji)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関